

『虞美人草』猿と座布団と産業革命

Junko Higasa

まず明治時代に起きた産業革命についてさらっておこう。それは織物という繊維産業から始まった。イギリスがアメリカ・インドから綿花を輸入して織物を生産する。次にその商品をより多く売るために流通手段が必要となる。しかも一度に多く運ぶとなれば船・鉄道が必要になる。するとそれらを作るために鉄が必要となる。これが産業革命の経路である。これの日本版が『虞美人草』第五章と第十章に描かれている。

先に第五章で宗近君と甲野さんが保津川下りをする。山の遙か上の方で鉦の音がするので、宗近君が見上げると「空高く動く黒い影」がある。それを宗近君は『まるで猿だ』と評する。そして『あれで一日働いていくらになるだろう』と思う。次に第十章で裁縫道具である『その鉦に猿が着いているのは、どういう訳だ。洒落かい』と宗近君が問うと、妹の糸子は『これ？奇麗でしょう。縮緬の御申さん』と答える。この二つは呼応する表現となっている。

まず第五章の方から見ると、第一章で甲野さんは叡山を見て『あの山は動けるかい』と問うた。猿は比叡山の使い番と言われる。その現在の叡山(現世利益主義)の猿(国)は宗近君に言わせると「頑固」である。「動かばこそ」と見えつつなかなか動かない。ここには天皇制が動くか、国の政治が民主化へ動くか、宗教が本来の人間性へ動くか、日本の産業が世界へ動くかという問いが見て取れる。「猿」は国家を表すと同時に猿回しのように働く国民のようでもある。産業発展のために危険を冒してまで働いていくらになるのだろう。甲野さんと宗近君が乗る舟は保津川を下る。保津川は丹後から京都への流通路である。それは明治期の日本経済を支えた生糸の流通経路を意味する。それから二人は京都の電車に乗る。流通は船から鉄道へと引き継がれる。

そして猿は動いた。「申」は戸籍が出来た年である。第十章で糸子の裁縫道具の和鉦についている縮緬の猿。その縮緬は丹後で生産され京都で商品化し流通させる。ここで改めて京都から東京への政権移行が強調され、更なる民主化が提示される。宗近君が糸子に「洒落かい」と言ったのは「さるかに合戦」のことである。それは『虞美人草』をよく理解した弟子:芥川龍之介の短編『猿蟹合戦』に反映されているように「猿」は国家、蟹は国民の象徴でもある。頑固な国は国民を働かせるために、渋々民主化を認めなければならない。けれど自由な権利を与えながらも、枠からはみ出さないように統制する必要がある。そうして猿は蟹のおむすびを取ったばかりでなく、蟹が育てた柿も独占してしまう。そのようにして日本経済を支える繊維産業は丹後～京都～東京へと動いた。それをさらに世界へ流通させるきっかけとなったのが博覧会である。

その博覧会であるが、第一回は上野で明治10(1877)年に開催された。その後、上野、京都、大阪まで政府主催であった。即ち国が全てを取り仕切っていた。そして第五回は明治40年の東京勸業博覧会であるが、その名に見て取れるように、ここで始めて東京府主催となった。それは国の中枢機関である政府が京都から東京へ動き、鉄道が急速に発展し、経済が拡大され、民主化が進んだことを意味する。大金を投じてでもそれを上回る経済効果が望めるオリンピックのようだ。そのように鉄道事業は博覧会に合わせて拡大した。その鉄道が急速に発展せざるを得なかった一つの理由は、第四回の大阪の博覧会で初めて海外出品物が認可された事情もある。第七章で『京都の電車か？あいつは降参だ。全然第十義以下だ…』という宗近君に甲野さんが「布設が世界一早

